様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月　５日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22520065
研究課題名（和文）　「神と人間の一致」についての研究―キリスト図像とドイツ神秘思想からの考察
研究課題名（英文）　ON THE UNION BETWEEN GOD AND HUMAN FROM THE VIEWPOINT OF ICON OF CHRIST AND THE GERMAN MYSTICISM

研究代表者
田島　照久　（TAJIMA　TERUHISA）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：50139474

研究成果の概要（和文）：
本研究では、キリスト教成立以来語られてきた「神と人間が一致する」というギリシア教父のテオーシスの言説に注目し、「神人合一」を説くドイツ神秘思想の教説を、教義上神であると同時に人であるとされるイエス・キリストを画いた「キリスト図像」と比較して、その意味を探った。その結果種々の「キリスト図像」が、キリストの人間の身体と不可分なペルソナに焦点を当てた受肉理解であるのに対して、エックハルトの受肉理解は人間的ペルソナ否定において、位格的結合の可能性と実現が万人に開かれた救済論的メッセージであることが確認された。またエックハルトの主張と異端判定理解との間には明らかな乖離があることが明確になった。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to elucidate how unique the German Dominican Meister Eckhart's doctrine of "the union between God and human" is within the Christian tradition of theosis originated from Greek Fathers in the early Christianity. Our particular approach was to compare Eckhart's doctrine with the Christology which is visually expressed in the icons produced in the devotions to Jesus Christ who is defined in the orthodox dogma as God-man in one Person. Our iconographical analysis clarified further that the understanding of Christ's Incarnation which is exhibited in those icons relies on the orthodox Christology that emphasizes Christ's humanity and historicity. This result was then contrasted with Eckhart's understanding of the Incarnation which intends to reinterpret Christ's soteriological role as expanding the possibility of such Incarnation for all humankind.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：①宗教哲学②　宗教学③ 美術史④ 西洋哲学

１．研究開始当初の背景

ドイツ神秘思想の中心的思想家であるマイスター・エックハルト（ca.1260-1328）はその言葉の中から 28 箇所が抜き出され、内 17 箇所が異端的言説であると断罪された高位のドミニコ修道会神学者であるが、断罪された言説の内 7 箇所が「神と人間の一致」に関するものである。

近年、ドイツのボッフム大学を中心とした研究者によってこうした言説の背景にある知性論がその依拠する先行的資料と共に明らかにされてきており、当時の異端審問の正式記録である『アヴィニヨン鑑定書』の理解とは全く異なる解釈地平が開ける可能性がでてきた。

研究代表者はこれまで異端断罪されたものの一つである「被造物は純然たる無である」という言説を「内的帰属の類比」構造を介して、存在論の地平で、整合的に解釈することを試みたが（拙著『マイスター・エックハルト研究』1996 年創文社刊、69－173 頁）、今回のテーマである「神と人間の一致」の言説も存在論とは異なる類比（アナロギア）構造を介して整合的に解明できる可能性があると考えている。

テーマである「神と人間の一致」のモティーフは一般に「神秘的合一（unio mystica）」と呼ばれ、これまでの欧米を中心とする研究者の間では「神の実地の認得（cognitio Dei experimentalis）」としてキリスト教の特殊な例外的信仰形態と見なされてきた。

とくに 13，14 世紀の「ドイツ神秘思想」の思想家、エックハルト、タウラー、ゾイゼ等の「神と人間の一致」をめぐる教説は、新プラトン主義的思惟伝統からの影響は語られてきたものの、ほとんどはアウグスティヌスやトマス・アクィナス等の思想との類似・相違関係から、すなわちローマ・カトリック教会の神学伝統という西方ラテン教会系譜の中だけでその特徴と質が測られてきたという研究史の現状がある。

こうした国内外の研究動向に対して、研究代表者は「諸宗教共存に向けてのキリスト教自己相対化の研究」（平成 16－18 年度科研費研究）の中でドイツ神秘思想の「神と人間の一致」をめぐる教説を、初期ギリシア教父たちの「人間神化（テオーシス）思想」の伝統系譜の内に位置づける試みをした。（『岩波講座宗教 4　根源へ－思索の冒険』「ドイツ神秘思想の経歴と現代への寄与」2004 年、189-215 頁）

「神と人間の一致」というギリシア教父以来の伝統的モティーフに光を当てることによって、これまでキリスト教信仰の正統から異端視されてきたドイツ神秘思想を、キリスト教信仰の根本動機を継承する思想形態であると再評価することが可能になると考える。

その際にはエックハルトの異端とされた言説を新たな解釈地平から見直す作業が必要とされるであろう。本研究計画はそれに向けての準備作業となるはずである。

キリスト図像に関してはすぐれた美術史的先行研究は多いが、「神と人間の一致」という神学的・救済論的視点からの図像研究は見当たらない現状である。「神の受肉」の問題と「人間神化」の問題とはギリシア教父時代から結び付けて語られてきたにもかかわらず、ドイツ神秘思想の「魂における神の子の誕生」の教説はローマ・カトリック教会の伝統では全くの例外的存在としてしか扱われていない状態であった。さらに図像上に表現されたキリスト像の研究も unio hypostatica の観点から解析した研究はない現状であった。

２．研究の目的

ある宗教の本質を把握しようとする場合、哲学的方法論を踏まえて磨き上げられ、きわめて高度にロゴス化された救済メッセージを理解することは必須なことであるが、それとともに、一般の民衆レヴェルでそうしたメッセージがどのように受け取られ受け継がれていったのかにも目を向ける必要があるであろう。

こうした視点から本研究計画では、もともとは、文字を読めない人々のために絵画テキストとして登場したキリスト教図像を手がかりにして「神と人間の一致」というテーマを図像学的に探るという方法を採るが、これまでの研究代表者の調査結果により、きわめて特殊な二種類のタイプのキリスト図像があることが明らかになっている。

一つは「神秘の葡萄搾り機図像」（葡萄搾り機の中でキリストが梁を背負って立ち、五つの傷口から血を噴き出している図像）であり、もう一つは「薬剤師キリスト図像」（薬局の内に立ち薬剤を調合するキリスト図像）である。研究期間内には、前述のエックハルトの「神と人間の一致」の言説をアナロギア論により解釈することを試みるとともに、これら二種類の図像タイプを「神と人間の一致」のテーマに向けて解釈し、得られた知見から「神と人間が一致する」とはどのようなことであるか、その意味を明らかにしていきたい。

本来極めて思弁的な「神と人間の一致」という神学上のテーマを、本研究計画では絵画という具体的表出を手がかりに、図像学（イコノグラフィー）、図像解釈学（イコノロジー）、および個々の形象モティーフを提供する源泉となっている宗教民俗学の領域から解明しようとする点に学術的な特色があり、方法論的な独創性があると考える。

「神と人間との一致」というテーマ自体に関して言うならば、以下のような理解を基礎と

するところに学術的な特色と独創的な点が存すると思われる。
「神と人間との一致」というキリスト教の中心テーマは、キリスト教成立当初のギリシア教父以来、いわばキリスト教そのものを成立せしめている根本動機として受け継がれてきたものであると考えられるが、それは本質的な二つの問に対する同じ一つの答として機能していると見ることができる。
一つは「イエスとは何者であるか」というイエスの身分に関する問への答であり、もう一つは「人間はいかにして至福たりえるのか」という人間存在の目標と完成に関する問への答である。前者の答として「神と人間の一致」は、イエス・キリストを神であると同時に人間であるとする、まさにカルケドン信経によって確立されたキリスト論の内実を意味するものである。後者の答として「人間と神の一致」は、「人間の至福は神との合一の内に存する」（マイスター・エックハルトの弟子グリュンディヒのエックハルトの言葉）ということ、すなわち「神と人間の一致」の内にこそ人間的生の目標である至福が存するという人間存在の完成の在り方を語るものである。そして両者の答は、三位一体論を確立したアタナシオスが「実に、この方（ロゴス）が人となられたのは、われわれを神とするためである」(『ロゴスの受肉』)」と語っているように、範型論的に一つに結び合わされる。すなわち神の受肉は人間神化のために生起したものであると受け取られていったのである。
以上のような研究代表者のテーマに対する基本理解を踏まえた上で、この研究計画によって明らかにされると予想されることは、上述のキリスト教の本質を問う「イエスとは何者であるか」という問と「神と人間の一致」という答が、キリスト図像の世界では「神秘の葡萄搾り機図像」や「薬剤師キリスト図像」の解析を通して苦しみと至福、痛みと解放、病と治癒などが輻輳した絵画コードで表現されていることが確認され、その結果「イエスとは何者であるか」という問と「神と人間との一致」という答からはイエスという存在が徹底的に外化、客体化された救済の授与者とされていることが浮き彫りにされるのに対して、ドイツ神秘思想では独自な知性論とアナロギア論に基づく「神秘的合一」の文脈で「わたし」の問題として、イエスという存在は徹底して内的、主体的に主題化されていることが確認されるであろう。
３．研究の方法
本研究ではキリスト教における「神と人間の一致」の表出を宗教哲学と図像学（図像解釈学)、という異なる研究領域で跡づけることをめざしているので、二つの領域に即した具体的なテーマおよび、方法が年次並行的に立てられることになる。宗教哲学の領域では、異端判定の理由とエックハルト自身の弁明内容を『アヴィニヨン鑑定書』に基づき検討し、エックハルトの知性論に与えたディートリヒの能動知性論の影響を明らかにした上で、エックハルトの『ヨハネ福音書注解』中のアナロギア論を精査する作業が年次段階的に行なわれる。図像学（図像解釈学）の領域では「神秘の葡萄搾り機図像」と「薬剤師キリスト図像」の映像資料収集と、イコノグラフィー的分析およびイコノロジー的解釈を年次段階的に行い、双方の研究領域から得た知見を「神と人間の一致」という共通テーマに照らしその意味を取り出す作業を最後にすることとした。
初年度の宗教哲学領域：
研究計画初年度は、ドイツ神秘思想家マイスター・エックハルトの「神と人間の一致」に関する言説に対して為された異端断罪の理由と根拠とを『アヴィニヨン鑑定書』に記されているエックハルト自身の弁明内容と照らして相互の論理枠組みに何らかの相違があるのかないのか、あるとするならばどういった相違なのかをまず検証することから始めた。
同時に同じドミニコ会の先人神学者フライベルクのディートリヒの二つの主著『至福直観について』と『知性認識と知性認識されるもの』から彼の知性論の主導原理である「本質的原因論（causa- essentialis-Theorie)」の構造解明に取り組むこととした。
研究計画初年度の図像学領域：
きわめて特殊なキリスト図像タイプである、「神秘の葡萄搾り機図像」、「薬剤師キリスト図像」」の中から、より作例の多い「神秘の葡萄搾り機図像」を中心に、現地調査、映像資料収集（申請者自身による写真撮影）を開始した。
「神秘の葡萄搾り機図像」と一般に呼ばれているこのキリスト図像はキリスト教美術の数ある図像タイプの中でも一段と人目を引く一種異様なものの一つである。葡萄搾り機の梁を背に負った裸形のキリストが、磔刑の際に受けた、両手両足右脇腹の五つの聖痕（stigma）から「聖血」を吹き出させている図像群である。中世末期の熱狂的な信仰が生み出した西方教会独自の主題であるといえよう。そこには受難の凄惨さとともに、それゆえに尊いとされた贖いの血が、その最後の一滴まで葡萄搾り機の中で搾りきられようとするかのような構図のもとで描かれている。
こうした一連の「葡萄搾り機の中のキリスト図像」の内にはいわばキリスト教の教義的・文化誌的図像コードといったものがふんだんに輻輳した形で存在している。こうしたコ

ード解釈を「イコノグラフィー（図像学)」の研究手法を用いて遂行し、さらに近年注目されているパノフスキーの提唱した「イコノロジー（図像解釈学)」の観点からキリスト教教義の民衆レヴェルにおける受容の姿を浮かび上がらせることを本研究計画ではめざしているのであるが、研究初年度は「神秘の葡萄搾り機図像」の映像資料および研究論文等の資料を、とくに作例が集中しているドイツ各地で収集し、イコノグラフィー的解釈に着手した。

研究計画２年目の宗教哲学領域：

『アヴィニヨン鑑定書』の検討結果に基づいて、エックハルトの「神と人間の一致」の言説がどのような思惟の枠組において語られているのかを探るために、エックハルトのラテン語による主著『ヨハネ福音書注解』を中心に「誕生論」の理論構造を解析した。その際、研究計画初年度に構造解明を試みているディートリヒの「本質的原因論」にエックハルトの「誕生論」がどれほど依拠しているか、その影響について確認し、検討を加えた。ディートリヒの知性論に関しては、「本質的原因論」を基礎とした彼の「能動知性」理解について、引き続き前述の２主著から探った。

研究計画２年目の図像学領域：

「薬剤師キリスト図像」の図像学的研究を中心とした。この図像の現地調査、映像資料収集（申請者自身による写真撮影）をドイツ各地で行った。

「薬剤師キリスト図像」とは、中世ヨーロッパ社会に権威ある職業として重きを成した「薬局」を背景として、その内局で信仰や愛、希望といった対神徳や、哀れみ、謙遜、柔和などの諸徳を薬剤として調合するキリストを画いた図像であるが、治癒と救済とがキリスト教においては一つに考えられていたことを示す貴重な図像群であるといえる。この中に画かれている諸モティーフをイコノグラフィー的観点から解釈をした。

４．研究成果

キリスト教成立以来語られてきた「神と人間が一致する」というギリシア教父のテオーシス（人間神化思想）の言説に注目し、「神人合一」を説くドイツ神秘思想の教説を、教義上神であると同時に人であるとされるイエス・キリストを画いた「キリスト図像」を手がかりにして、その意味を探った。その結果伝統的「キリスト図像」とくに「ブドウ搾り機の中に立つキリスト図像」がホスティア（聖餅）の形象を伴っていること等の分析から、位格的結合 unio hypostatica の教義にのっとってはいるが、キリストの人間の身体と不可分なペルソナに焦点を当てた受肉理解であるのに対して、エックハルトの受肉理解は人間的ペルソナ否定において、位格的結合の可能性と実現が万人に開かれた救済論的メッセージであることが確認された。また「父から子の誕生」という神学的テーマが、ラテン語著作において「始原」と「始原から生みだされたもの」という「本質的始原論」の論理構造に従って、「義」（神の完全性）からの「義なる者」（義である人間）の誕生としてアナロギア的に語られていることを確認し、その論理構造を追った。その結果エックハルトの主張と異端判定理解との間には明らかな乖離があることが明確になった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３　件）

田島照久、「エックハルトにおける＜本質的始原論＞と＜義なる者＞（iustus）―異端判決と‘in quantum’語法による弁明」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第５７輯 2012 年２月 26 日 3－19 頁。

田島照久、「永遠の第一の単一なる今（primum nunc simplex aeternitatis）―マイスター・エックハルトの永遠理解―」、『フィロソフィア』巻 98 号　1-21 頁、2011 年 3 月。

田島照久、「永遠の第一の単一なる今（primum nunc simplex aeternitatis）―マイスター・エックハルトの永遠理解―」、『フィロソフィア』巻 98 号　1-21 頁、2011 年 3 月。

〔学会発表〕（計５　件）

田島照久、「エックハルトの「永遠」理解―Panentheismus の観点から」日本宗教学会、2012 年 09 月 08 日皇学館大学。

田島照久、「映し込まれた永遠―＜魂の根底＞と＜始原＞をめぐるエックハルトの場所論」上智大学哲学会（招待講演)、2012 年 10 月 28 日、上智大学。

田島照久、「マイスター・エックハルトにおける時間論の構造」、日本宗教学会、2011 年 9 月 3 日、関西学院大学。

田島照久、「マイスター・エックハルトの＜反復語法＞と異端審問判定」、日本宗教学会、2010 年 9 月 5 日、立正大学。

田島照久、「マイスター・エックハルトの＜本質的始原論＞―その構造と論理射程―」、早稲田大学哲学会、2010 年 7 月 10 日、早稲田大学

〔図書〕（計１　件）

『ヨーロッパ中世の時間意識』、分担執筆「ドイツ神秘思想における時間把握―マイスター・エックハルトの瞬間論」知泉書館、2012 年 5 月

〔産業財産権〕

○出願状況（計０　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　田島照久（TAJIMA　TERUHISA）
　（早稲田大学・文学学術院・教授）
　研究者番号：50139474

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし